法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-08

ニュース・フレーム論の認識論的探究（１）：パラダイムと言語ゲーム

FUJITA, Mafumi / 藤田, 真文

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Hosei journal of sociology and social sciences / 社会志林
(巻 / Volume)
69
(号 / Number)
2
(開始ページ / Start Page)
35
(終了ページ / End Page)
49
(発行年 / Year)
2022-09
(URL)
https://doi.org/10.15002/00025821

ニュース・フレーム論の認識論的探究（1）

――パラダイムと言語ゲーム

藤　田　真　文

1　ニュース・フレーム論とパラダイム概念

1.1　本論文の目的

本論文は，パラダイムと言語ゲームという２つの概念から，ニュース・フレーム論を認識論的に探究する。ニュース・フレーム論の「認識論epistemology」的探求は，ニュース・フレームが，報道された出来事のどのような要素（what）をどのような方法（how）でフレーミングしているのかを考察することを理論的目的とする。

ニュース・フレーム論では，「新聞記事やテレビニュースは，単に出来事を伝えるだけではなく，報道された出来事に対する『見かた』も同時に伝えている」と仮定し検証する。B.Van Gorp は，「メディアは出来事そのものの情報だけでなく，それをどのように解釈すべきかについても公衆に提供している。フレーミングはメタコミュニケーションの一形態である」としている（Van Gorp 2007:65）。多くのニュース・フレーム論で参照引用される（Matthes&Kohring 2008:264）R.M.Entman は，ニュース・フレームを以下のように定義している。

> フレーミングは，本質的に選択 selection と顕出化 salience を含んでいる。フレーム化（to frame）とは，知覚された現実のいくつかの側面を選択し，コミュニケーションの文脈において，記述された要素を特定の問題の定義づけ，因果関係の解釈，倫理的評価，および/または解決方法の推奨を促すような方法でより際立たせることである。（Entman 1993:52，強調は原文）

Entman は，フレームが以下のような基本的機能のうち少なくとも二つを遂行するとする。①（出来事または争点の）結果または状況を問題のあるもの（problematic）と定義する，②原因（cause）を特定する，③倫理的判断（moral judgement）を持ち込む，④解決策（remedy）または改善（improvement）を推奨する（Entman 2004:5）。Entman は，この中でもすべてに先立つ「問題の定義」と公共政策への支持（あるいは反対）に直接結びつく「解決策」が重要とした（Entman 2004:6）。

だが，例えばフレームが問題の定義づけ＝「（出来事または争点の）結果または状況を問題のあ

るもの（problematic）と定義」するとしても，それは新聞記事やテレビニュースのテクストにどのように現れるのか，または新聞記事やテレビニュースのテクストのどのような作用によって遂行されるのか，筆者はニュース・フレーム論においてまだ共通理解が形成されていないのではないかと考えている。

S. D.Reese は，フレームの操作的定義について議論する中で，「フレームは抽象的な原則 principles に基づいており，明示されているテキストとは同じではない」とする（Reese 2001:11-12）。「フレームとは，社会的な意味を構造化するためにメディア・テキストに働きかける抽象的な原則，ツール，または解釈の『スキーマ』である」とも定義している（Reese 2001:13）。B.Van Gorp もまた，「フレームは，気づかれずに暗黙のうちに使われることが多いため，その影響は不可視のものとなる」とする（Van Gorp 2007:63）。

しかしながら筆者は，「抽象的原則」「不可視」というように扱いの難しい概念であっても，ニュース・フレームがどのような研究手法で操作化し検証できるのかという「方法論 methodology」に結びつけることが必要と考える（Van Gorp 2007:71）。そのために筆者は，①パラダイムとその言語哲学的基礎としての言語ゲーム，②プラグマティズム，③社会的構築主義という三つの哲学的理論的知見を参照し，ニュース・フレーム論を認識論的に探究する。本論文は，その第一段階である。本論文では以下，①ニュース・フレーム論におけるパラダイム概念の使用，② T.S.Khun のパラダイム論，③ L.Wittgenstein の言語ゲーム論と像の議論と，徐々に理論的淵源に遡っていく。

1.2　ニュース・フレーム論におけるパラダイム概念の使用

後の項で詳しく検討するが，Khun は『科学革命の構造』において，「パラダイム」paradigm を「実際の科学の仕事の模範となっている例――法則，理論，応用，装置を含めた――があって，それが一連の科学研究の伝統をつくるモデルとなるようなもの」と定義する（Khun 邦訳書 1971:13）。パラダイムによって一定数の研究者集団が，事実の測定，事実と理論の調和，理論の整備という三つの部類の問題についての考え方を共有し，「通常科学」normal science が形成される（Khun 邦訳書 1971:38）。

ニュース・フレーム論にも，研究者集団が共有する模範という意味でパラダイムを使用した論考がある（Entman 1993; D’Angelo 2002）。しかし本論では，フレーム概念と意味的に近接する形で，取材や記事作成に関してジャーナリスト集団が共有するモデル，またモデルに基づいた実践がテクストに現れた結果という意味でパラダイムを使用している論考を検討する。

Reese は，Khun のパラダイム概念を引用しながら，「ジャーナリストは，科学者と同様，世界を理解するためにパラダイムに依存する。パラダイムは，それが彼らにとって有用な実践的指針となり，彼らがその基本的前提を共有する限り価値を持ち続ける」「パラダイムという概念を通じてジャーナリズムの『職業的イデオロギー』を探求し，それを職業的実践と関連づけ，より大きなイデオロギー的機能を考察することによって，支配的イデオロギーと職業的イデオロギーの関連性を検討する」としている（Reese 1990:391）。Reese はまた，「Khun がいうように，パラダイムは明

確なルールというよりも模範（example）である」とも指摘している（Reese 1990:392）。

Reese は，「客観主義」がジャーナリズムのパラダイムとなっているとする。[i]「科学もジャーナリズムも経験主義的な情報収集活動であり，その実践者には学習可能なルーチンが発達している。科学者もジャーナリストも冷静な世界の観察者であることが前提されており，自らの観察によって導かれている。（中略）科学もジャーナリズムも，経験主義の実証主義的な信条，つまり外界をうまく知覚し理解できるという信念に導かれている」とする（Reese 1990:392-3）。Reese はまた，パラダイムを脅かす変則性 anomaly に通常科学が対応するのと同じように，ジャーナリストが異常な出来事に遭遇しジャーナリズムの「客観主義」パラダイムが揺らいだ場合でも，修復が行われるとする。修復は，ジャーナリストの職業的イデオロギーと資本主義や民主主義という社会の支配的イデオロギーに，ジャーナリストの実践を適応させることで行われる（Reese 1990:394-6）。[ii]

D. M.McLeod と B. H. Detender は，マス・メディア報道には「抗議パラダイム protest paradigm」ともいうべき報道傾向があるとした。「ニュースの内容を調べてみると，抗議行動に関する報道は，抗議者の争点よりも外見に焦点を当て，社会批判よりも暴力的な行動を強調し，抗議者が選んだ対立相手よりも警察と対立させ，抗議行動の効果を軽視する傾向があることがわかる」とする（McLeod & Detender 1999:3）。本論でも引用した Entman のフレーム定義に続けて，「多くの研究がニュース報道の様々なフレーミング効果を検討してきたが，抗議パラダイムを通して生み出される現状維持を支持するようなフレーミング効果を検討した研究はほとんどない」としていることから，McLeod と Detender は明らかにフレームとパラダイムを近接した概念として使用している（McLeod & Detender,1999:3）。「抗議パラダイム」は，「ジャーナリストが抗議活動の報道に適用する暗黙のモデル」となっている（McLeod & Detender 1999:6）。

さらに McLeod と Detender は，「抗議パラダイム」が抗議活動に対するオーディエンスの認知に与える影響を検証するために，フレーミングの現状維持支持効果が異なった数パターンのテレビニュースの実験刺激を被験者に視聴させたのち，抗議者への共感，抗議活動の効果，抗議を扱ったニュースの価値などを評価させている（McLeod & Detender 1999:8-20）。[iii]

Reese の「客観主義」パラダイムは，ジャーナリストが共有する実証主義・経験主義的な信念に関するものであり，McLeod と Detender の「抗議パラダイム」は，抗議行動という報道対象に対するフレーミングの特性を意味しており，両者は次元をやや異にしている。

1.3 パラダイム概念のニュース・フレーム論への示唆

次に，Khun のパラダイム概念がニュース・フレーム論にどのような示唆を与えるのか，『科学革命の構造』を検討していきたい。

---

[i] 他に客観主義パラダイムに言及した論考として，Fuglsang 2001:185;Hanitzsch 2007:371など。

[ii] なお，Shoemaker& Reese 2014：83-6,167-8において，ニュースの客観性パラダイムが再論されている。

[iii] 他に抗議パラダイムに言及した論考として，Pavlik 2001:313; Boyle& McLeod 2018:296-301など。

先に引用したように，パラダイムとは法則，理論，応用，装置を含めた模範，一連の科学研究の伝統をつくるモデルとなるようなものであった。パラダイムを共有する研究者が集団をつくり通常科学が形成される。Khun は，あるパラダイムの下に研究者が集まるのは，研究者たちが「重要だと認めるようになった」問題を解決する際に，他のパラダイムよりも「成果が上がるから」だとする。では「成果が上がる」とは，どういうことなのか。

> より成果が上がるとは，一つの問題に完全に成功するとか，より多くの問題をうまく説明するとかいうことではない。パラダイムの成功は，（中略）初めから特定の未知の分野において発見さるべき成果を約束することに大いにかかっている。通常科学とは，こういう約束が実現される過程のことである。（Khun 邦訳書 1971:27）

研究者があるパラダイムに依拠するとは，「◯◯という研究対象に，△△という研究方法や実験装置で接近すれば，××という結果が得られる」との確信をもって研究を遂行することを意味する。反対に，どのような研究結果が得られるか見通しがないままに，いたずらに事実を蒐集しても「それは一つの泥沼」にはまるようなものである（Khun 邦訳書 1971:19）。

> 歴史の上でも，また現在実験室で行なわれていることでも，よく調べてみると，このような仕事は，パラダイムが支えるお仕着せの，かなり融通の利かない鋳型に自然を嵌め込む試みである。通常科学の目的には，新しい種類の現象を引き出すことは含まれていない。鋳型に嵌まらないものは，全く見落とされてしまう。（Khun 邦訳書 1971:27-8）

以上のような Khun のパラダイム概念がニュース・フレーム論に示唆するところは，明らかなように思われる。例えば，「政府の政策という取材対象に，記者会見という取材方法で接近すれば，政治面の記事を書くことができる」「今日発生した刑事事件という取材対象に，警察発表という取材方法で接近すれば，社会面の記事を書くことができる」など。この時，政府の政策や刑事事件という取材対象は，記者会見や警察発表という取材方法によって接近できる「限り」の事象であり，その取材方法をとれば政治面・社会面の記事を書くことができると「約束」されている。

記者会見で発表された政府の政策は，政治家と特定業界の癒着によって作られたものかもしれない。報道した刑事事件には，警察発表では知ることができない事件の要因があったかもしれない。だが，記者会見や警察発表という取材方法によって，社会の出来事を「パラダイムが支えるお仕着せの，かなり融通の利かない鋳型に嵌め込む」ことで，「鋳型に嵌まらないものは，全く見落とされてしまう」ことになる。

もう少し Khun のパラダイム概念が示唆するところを見てみよう。通常科学のパラダイムに依拠して研究を行なっている研究者が，そのパラダイムの予想に当てはまらない事象に遭遇した場合，その研究者はどのように対応するのであろうか。

理論を適用する際に，これまで経験したよりはるかに大きい，説明し難い不一致があっても，必ずしも深刻な反応を引き起こすとは限らない。常に何らかの不一致はあるものである。そして，どんなにやっかいなものでも，最後には何とかなるものである。その際科学者たちは，特に他にもいろいろ問題を抱えている場合は，ただ待とうとする。（Khun 邦訳書 1971:92）

パラダイムの予想に一致しない観察や実験の結果が出た場合でも，通常科学の研究者は，単なる計算のミスではないか，観察・実験器具の不具合ではないか，通常科学の範囲内の別の理論で説明ができるのではないかと考える形で反応する。

ニュース・フレーム論に適用すれば，これは通常の報道枠組みでは処理できないような社会的出来事，事件・事故が起こった場合にあたる。その時のジャーナリストの対応には，いくつかのパターンが考えられる。ジャーナリストは，事件・事故の目撃者の証言が間違っているのではと疑うかもしれない。また，通常の報道枠組みで，その出来事，事件・事故を解釈し直そうとするかもしれない。また，さほど重要な出来事，事件・事故ではないと無視するかもしれない。

ここまで述べてきたパラダイム概念からのニュース・フレーム論への示唆は，G.Tuchman が『ニュース社会学』で指摘したジャーナリストのルーティンと共通する点が多い。すなわち，やみくもに取材して事実を収集するのではなく，役所，警察，裁判所といった空間に記者を常駐させニュースの「網」を張っておく。ニュースを類型化して，その類型に当てはまるように報道するなどのルーティンである（Tuchman 邦訳書 1991:28-44,64-85）。

2　ニュース・フレーム論と言語ゲーム

2.1　通常科学と言語ゲーム

パラダイム概念からここまで得られた示唆は，Tuchman が指摘するようにニュース・フレーム論でこれまで認識されてきた知見を出るものではない。だが，Khun の『科学革命の構造』の意義はむしろ，揺るがないと思われていた通常科学のパラダイムが別のパラダイムに転換する「科学革命」がいかにして起こるのか，パラダイムが転換するとはどういうことなのかを明らかにする点にある。さらに，クーンがパラダイム概念の発想を得た Wittgenstein の『哲学探究』を参照することによって，パラダイムと科学革命についての理解が深まるものと思われる。

Khun は，科学史において，一定数の科学者集団が共有しているパラダイムを，一般化した明確な「ルール（規則）」のようなもので記述することは難しいとする。Khun は，「しっかりしたルールの体系がないなら，特定の通常科学の伝統に科学者を結びつけるものはいったい何であろうか。『パラダイムの直接的吟味』とは何を意味しうるか。このような問いに対する答えの一部を，故ルードヴィッヒ・ヴィドゲンシュタインが全く違った文脈の中で展開している」とする（Khun 邦訳書1971:50）。Khun は Wittgenstein から与えられた示唆について，次のように言及している。

われわれは，意識的にせよ直感的にせよ，椅子とか木の葉とかゲームとかが何「である」かを知らねばならない，というふうに，ふつう答えられてきた。つまり，すべてのゲームが，そしてゲームだけが共通して持っている一連の属性を，われわれは把握しなければならないのである。しかし，ヴィドゲンシュタインは，われわれが言語を用いるやり方やそれを当てはめる世界を与えれば，そのような一連の特性は必要ないと結論した。（中略）むしろこれまで観察されたことのない活動に直面して，今見ていることが，これまで「ゲーム」という名前で呼ぶ慣わしであった多数の活動との間に密接な「家族的類似性」を認めるからゲームという言葉を使うのである。（Khun 邦訳書 1971:50-51）

これこそが，Wittgenstein が『哲学探究』おいて展開した「言語ゲーム」と「家族的類似性」の考え方である。Wittgenstein は，「『言語ゲーム（言語劇）』という言葉は，言葉を話すことがある活動の一部，ある生活の形の一部であることを強調するために用いられている」という。そして，命令，記述，対象の制作，報告，推測，仮説検証，物語の創作朗読など，多様な言語ゲームがあるとする（『哲学探究』§23, Wittgenstein 2009, 邦訳書 2020:36-7）。Wittgenstein は，命令する，問う，物語る，雑談をするなどの行為は，「歩く，食べる，飲む，遊ぶといった行為と同様に，我々の自然誌の一部なのだ」という（『哲学探究』§25, Wittgenstein 2009, 邦訳書 2020:39）。

つまり Wittgenstein は，すべての言語行為に共通する属性（ルール）を探すよりも，日常生活で言語を用いてわれわれが何を行なっているかを見るべきだとしているのである。親と子の容貌が似通っている，でも完全に同じではないように，「家族的類似性」によって，例えば命令と質問は言葉を話すことによって行われるゲームとして探究される。Wittgenstein が，『哲学探究』おいて範型（パラダイム）概念を使っているのは以下の部分である。

存在しなければならないかのように思えるものとは，言語の一部なのだ。それは我々の言語ゲームにおける範型（パラダイム），すなわちそれとの比較対照が行われるものなのだ。そして，このことを確認することは，重大な意味を持ちうるのだ。しかし，それでもやはり，それはあくまで我々の言語ゲーム――すなわち我々の表現方法――に関する確認である。（『哲学探究』§50, Wittgenstein 2009, 邦訳書 2020:63）

ここで範型（パラダイム）とされているものは，言葉を話すことから抽象化されて抽出されるルールではなく，実際にこのようなゲームをしているという模範である。「ことをよりはっきりさせるためには，類似した沢山のケースと同様，起こっていることを詳しく観察しなければならない」（『哲学探究』§51,Wittgenstein 2009, 邦訳書 2020:64）。

再び，Khun のパラダイム論にもどると，次のような箇所に言語ゲーム論からの示唆を見てとることができる。

同じようなことが，特定の通常科学の伝統の中に生じるいろいろな研究問題やテクニックについても当てはまる。これらの研究問題やテクニックの間に共通しているものは，（中略）これらが，科学者の集団がすでに評価の定まった業績として認めている科学の仕事の一部に似るか，それともそれをモデルとしているからである。（中略）だから完全にルールを心得ている必要はない。自らの属する研究の伝統の中にある相互の諒解事項は，その背後にあるルールや仮定の存在を必ずしも意味しない。そのようなルールや仮定は，後から歴史的哲学的研究で見つけられ，つけ加えられるものである（Khun 邦訳書 1971:51-2）。

科学者は決して概念や法則や理論を抽象的なものとして，それ自身として学ぶものではないことは，すでに明らかである。むしろこのような知的な道具立てには，科学者は初めからその適用と共に，適用を通して示される歴史的，教育的なセットの中で遭遇するのである。新理論は，常にある具体的な幅を持った自然現象への適用と共に発表される（Khun 邦訳書 1971:52）。

研究者が依拠するパラダイムは，「◯◯という研究対象に，△△という研究方法や実験装置で接近する」という実践の模範（モデル）によって示される。そして，通常科学の中にいる研究者どうしで，その模範に従って観察や実験を行えば，「××という結果が得られる」というゲームを行なっているのである。

これをさらにニュース・フレーム論に敷衍すれば，ニュース・フレームもまた，「◯◯という取材対象に，△△という取材方法で接近する」というジャーナリストの職業的実践の模範ということになる。そして，職業的実践の模範に従った結果，「××という記事を書くことができる」ことになる。ジャーナリストが「自分は◯◯というルールに従って取材や記事作成をしている」と意識化，言語化できなくても，ニュース・フレームによる実践が可能となる。先に引用した「フレームは抽象的な原則principlesに基づいており，明示されているテキストとは同じではない」とする Reese や，「フレームは，気づかれずに暗黙のうちに使われることが多いため，その影響は不可視のものとなる」とする Van Gorp は，Khun のパラダイム概念と同じ性質をニュース・フレームに見ていることになる。

となると，『哲学探究』の言語ゲーム論で Wittgenstein が提起したように，ニュース・フレームの中でジャーナリストが実践していること（何を表現しようとしているのか）を，「類似した沢山のケースと同様，起こっていることを詳しく観察」することが必要となる。

2.2　科学革命とゲシュタルト変換

それでは，ある通常科学のパラダイムから別のパラダイムへの「科学革命」はどのように起こるのであろうか。Khun は，「科学革命を起こす研究者は，通常科学のパラダイムをよく知る研究者である」という逆説的な見解を示す。「変則性に気付いたことが――つまり，自分のパラダイムか

らは出てこないような現象に気付いたことが――革新性に気付く道に導く本質的役割をした」（Khun 邦訳書 1971:64）。

Khun は変則性への気付きがどうやって生まれるのか，ブルーナーとボストマンの変則トランプの実験を参照して説明する。変則トランプの実験とは，被験者にトランプのカードをチラッと見せて当てさせる実験である。研究者は，普通のカードの中に少し模様が変わったカード（黒のスペードに赤い縁取りがあるなど）を混ぜておく。変則的なカードを混ぜる枚数が少ないうちは，変則的なカードも普通のカードとみなされていた。ところが，変則的なカードを少し増やすと，被験者はためらい始め，変則性に気づき始める。さらに変則的なカードの枚数を増やすと躊躇と混乱が加わり，ある時点からたいていの被験者が見たカードを変則的なカードだと言い当てられるようになったという。

> 科学では，トランプの実験と同じく，革新的なものは，予測に反するという困難の中から，抵抗を受けながら，やっとあらわれて来る。初めは予想した当たり前のことだけが，後で変則性が認められるような事情の下でも経験される。しかしさらに事情に通じると，どこかおかしいということに気付き始め，今までもどこかおかしかったのではないか，考えるようになる。変則性に気付くと，初めから変則的なものが予測されるように，概念のカテゴリーを適応させる努力をする期間が生じる。この点において発見は完成されたことになる。（Khun 邦訳書 1971:71-72）

Khun によれば，新しいパラダイムへの転換は，先行する業績に何らかの知見を付け加える通常科学の累積的な過程とはまったく違うという。パラダイム転換では，まったく新しい土台からその研究分野を再建し，基本的な理論的な前提や研究方法を変えなければならないとする。そして，新しいパラダイム転換とは，視覚ゲシュタルトの変化に似ているとする。

> 科学の進歩のこの位相は，視覚ゲシュタルトの変化に似ているという点を強調した人もいる。初め鳥に見えた紙の上の点が，今やかもしかに見えたり，またその逆にうつる，というのである。（中略）科学者は，ある物を何か他の物のように見るのではない。彼らはむしろそれを直視する。（中略）科学者にはゲシュタルトの見方をあれこれ変えて見る自由はない。しかし，ともあれゲシュタルトの切り変えは，今日ではおなじみのものになっているから，全面的なパラダイムの変更の際に起こることの基本的な原型と考えることは役に立つ。（Khun 邦訳書 1971:97）

パラダイム転換とゲシュタルト変換の相似について，Khun は Wittgenstein 直接言及してはない。だが，このゲシュタルト変換もまた，Wittgenstein が『哲学探究』で考察した重要なテーマであった。「科学者は，ある物を何か他の物のように見るのではない。彼らはむしろそれを直視する。（中

略）科学者にはゲシュタルトの見方をあれこれ変えて見る自由はない」と Khun が書いたゲシュタルト変換の性格が，『哲学探究』を参照することでより明確になる。

Wittgenstein は，ゲシュタルト変換を「アスペクトのひらめき」という言葉で考察していく。ここでは，アスペクトは「見方」としてのアスペクトと「見え方」のアスペクトの両方を含む概念として使われている（Wittgenstein 2009, 邦訳書「訳註」2020:533）。ある人の顔（例えば現在の同級生）をじっと見ていると，その顔が突然別の人の顔（昔の友人）に似ていることに気づく。見ている顔は変わっていないはずなのに，違ったように見ている。このような経験を，Wittgenstein は，「あるアスペクトに気づくこと」と呼ぶ（『哲学探究』第二部§113, Wittgenstein 2009, 邦訳書「訳註」2020:402）。

Wittgenstein が引用したジャストローの「ウサギーアヒルの頭」（図１）の絵を事例にすると，「アスペクトのひらめき」は理解しやすい（『哲学探究』第二部§118, Wittgenstein 2009, 邦訳書「訳註」2020:404）。

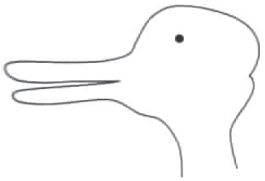

図１：「ウサギーアヒルの頭」

これを「ウサギの頭の絵だ」と見る人もいるだろうし，「アヒルの頭の絵だ」見る人もいるだろう。だが，同時に「ウサギでもアヒルでもある」と見ることはできるだろうか。筆者にはできない。Wittgenstein はこの絵について，「『絵のウサギ』でも『絵のアヒル』でもあるような，一定の事物が存在する，と言うことはもちろんできる。それは，絵やスケッチだ。―しかし印象は，同時に絵のウサギの印象と絵のアヒルの印象になることはない」とする（『哲学探究』第二部§157, Wittgenstein 2009, 邦訳書 2020:414-5）。

対象について「ある見方」でじっと見ていると，「別の見方」ができなくなる。反対に「別の見方」で見てしまうと，これまで見ていた見方では対象を見ることができなくなる。Wittgenstein は，「アスペクトには，その後消えてしまうある容貌が存在する。あたかも，そこには顔があって，私は先ずそれを真似，次いで，真似ることなくそれを受け入れているかのように思われる」（『哲学探究』第二部§238, Wittgenstein 2009, 邦訳書 2020:438）という。この「アスペクトのひらめき」は，先ほど引用した Khun の「科学者は，ある物を何か他の物のように見るのではない。彼らはむしろそれを直視する。（中略）科学者にはゲシュタルトの見方をあれこれ変えて見る自由はない」というゲシュタルト変換の様相そのものである。

そして，対象について「ある見方」で見ていると，「別の見方」ができなくなる。反対に「別の見方」で見てしまうと，これまで見ていた見方では対象を見ることができなくなる。パラダイムやアスペクトのこのような性格は，そのままニュース・フレーム論に転用することができるのではないだろうか。

2.3　Wittgensteinにおける「像」

パラダイム概念からは離れるが，Reeseのいう「客観主義」パラダイム（＝「科学もジャーナリズムも外界をうまく知覚し理解できるという信念に導かれている」）とその批判のために，Wittgenstein における「像」Bild 概念とその変遷にも言及したい。

一般に前期 Wittgenstein と言われる『論理哲学論考』では，像は世界の「模型」と考えられていた。

2.1　私たちは事実の像をつくる。

2.11　像は，論理空間の状況をあらわしている。事態が現実になっていることを，そして事態が現実になっていないことを，あらわしている。

2.12　像は，現実の模型である。

2.13　対象に対応しているものは，像では像のエレメントである。

2.14　像のエレメントが，像では対象の代理をしている。

（中略）

2.15　像のエレメントたちが特定のやり方で関係しあっているということは，事柄たちがその特定のやり方で関係しあっているということを，あらわしている。

像のエレメントたちのこのつながりを，像の構造と呼ぶことにしよう。そしてその構造の可能性を，像の写像形式と呼ぶことにしよう。

（Wittgenstein 2003, 邦訳書 2014:14-15）

ここでいう「事態」（＝状況，事柄）とは，事実として成立しているにせよ，成立していないにせよ，論理的に可能な事柄を意味する。その中で「事実」は成立している「事態」ということになる。「机の上にペンがある」という命題（言葉）は，現実に机の上にペンがあれば，事実の「像」となる。そして，「机」「の上に」「ペン」「ある」が像のエレメント（構成要素）であり，そのエレメントが関係しあって「写像形式」をなす（古田 2019:44-45,62-69）。『論理哲学論考』では，像は現実の対象に対応して，それを写しとっているとするのである。

ニュース・フレーム論の認識論を検討するために，『論理哲学論考』の像概念を少し丁寧に見ておきたい。「2.1　私たちは事実の像をつくる」。テレビニュースでも新聞記事でも，表現されているのは報道「対象」の「像」と言っていいであろう（映像と言語の相違，音声言語と文字言語の相違などの検討はここでは留保する）。2.11により，テレビニュースや新聞記事に表現される像の論

理空間は，現実でもありうるし，現実となっていないこともありうる。例えば，「ロシアはウクライナに軍事侵攻している」と「ウクライナはロシアに軍事侵攻している」は，どちらも論理空間上では成り立っている。だが，「ウクライナの軍事侵攻」は現実ではない（おそらく2022年７月時点では）。現実となっていない後者の像は，フェイクニュースということになる。

2.12により，テレビニュースや新聞記事は，真偽どちらでも現実の「模型」となることができる。2.13と2.14により，ニュースが伝える「ロシアはウクライナに軍事侵攻している」という像の「ロシア／ウクライナ／軍事侵攻／する」というエレメント（言葉）が，現実の対象に対応していて，現実の対象の代理をしている。

ここまでは至極当たり前のことを言っているように了解されるかもしれないが，この考察の先にWittgensteinが記述していることは，われわれを思考の袋小路に誘い込むように思われる。

2.22　像が描写するのは，描写するものの真偽に依存せず，写像形式によって，である。
2.221　像が描写しているものが，像の意味である。
2.222　像の意味と現実との一致・不一致が，像の真・偽となる。
2.223　像の真・偽を見わけるために，私たちは像を現実と比較する必要がある。
2.224　像からだけでは，真・偽を見わけることができない。
2.224　アプリオリに真である像は，存在しない。

（Wittgenstein 2003, 邦訳書 2014:18）

「ロシアはウクライナに軍事侵攻している」ことも，「ウクライナはロシアに軍事侵攻している」ことも可能性としてはあり得るので，写像形式としては成立しているだろう。しかし，2.223で「像の真・偽を見わけるために像を現実と比較する必要がある」，さらに「像からだけでは，真・偽を見わけることができない」という2.224で思考停止に陥らないだろうか。現実と比較して真偽を見わけるとしたら，「ロシアはウクライナに軍事侵攻している」という像は，実際にウクライナまで行かなければ真偽を確かめられないということになろうか。

このあと『論理哲学論考』の Wittgenstein は，真偽の判断を自然科学の側に投げ出し，哲学は命題の明晰化のみに関わるとして，その精緻化に議論を進めてしまう。

4.11　正しい命題たちの総体が，自然科学全体（または自然科学たちの総体）である。
4.111　哲学は，自然科学たちのうちのひとつではない。（中略）
4.112　哲学の目的は，考えを論理的にクリアにすることである。
（中略）哲学の成果は，「哲学の命題」ではなく，命題がクリアになることである。（後略）

（Wittgenstein 2003, 邦訳書 2014:48）

像の真偽判断の問題については，プラグマティズムなどの検討を経てまた考察したい。ただ，こ

こでは「像からだけでは，真・偽を見わけることができない」という Wittgenstein の主張は，検討すべき命題として保持しておきたい。ニュース・フレーム論に敷衍すれば，テレビニュースや新聞記事は，それだけでは自らの真偽を確定できないということになる。「オーディエンスのメディア・リテラシーを高めれば，フェイクニュースを見わけることができる」などの主張の安易さを考えるうえで重要と思われる。

さらに検討が必要なのは，後期 Wittgenstein は，前期『論理哲学論考』の像の概念は不十分であったと『哲学探究』などで自己批判した点である。

> 我々が「像は我々にある特定の使用を強いると信じていた」のは，あるケースのみを念頭に置き，別のケースについてまったく考えていなかったからなのだ。（中略）ここで重要なのは，ある言葉を聞いたとき，同じものが我々の頭に浮かびながら，その使用は異なるということがありうるということを認識することなのだ。（『哲学探究』§140,Wittgenstein 2009，邦訳書 2020:125）

この一節の直前で Wittgenstein は，「杖を突いて急な坂道を上る老人を描いている」像を見る，という例を出している。そして，どうしてその像を「坂道を上っている」と解釈するのか，と自問する。「老人が同じ姿勢で道を後ろ向きに滑り落ちても，同じように見えるのではないか？火星人ならこの像をそのように描写するかもしれない」（Wittgenstein 2009，邦訳書 2020:124）。

野矢茂樹は，『論理哲学論考』と『哲学探究』との違いを次のようにいう。

> 『論理哲学論考』はこうした本性や生活形式をまったく視野に入れていなかった。そして像と言語使用の関係を論理的なものとみなしていた。いわば火星人にも当てはまる完璧にア・プリオリな秩序を求めていたのである。それが，「像が特定の使用を強いると私は思っていた」とされる『論理哲学論考』の誤りだった。（野矢 2022:216）。

そして野矢は，『哲学探究』の「文と像とを比べる場合，肖像画（歴史的描写）と比べるのか，それとも風俗画と比べるのかをよく考えなければならない。そしてどちらの比較にも意味がある」（『哲学探究』§522,Wittgenstein 2009，邦訳書 2020:301-2）という一節を引用しながら，「『論理哲学論考』の像概念は事実を写しとったものであるから，肖像画（写実）しか考えていなかったということになる。だが，『哲学探究』は人々の暮らし方を表わすような風俗画も視野に入れ，肖像画に限定されない仕方で像を捉えている」としている（野矢 2022:217）。ここでも，先に言及した，「すべての言語行為に共通する属性（ルール）を探すよりも，日常生活で言語を用いてわれわれが何を行なっているかを見るべきだ」という『哲学探究』の立場が貫かれているのである。

『哲学探究』での像の考察が，ニュース・フレーム論に示唆する点として，第一に外界をうまく知覚し理解できるとの信念に導かれている「客観主義」パラダイムへの批判の視点があげられる。

「客観主義」パラダイムは，像は世界を写し取る「模型」だという『論理哲学論考』と同じ認識論の上に立っているのではないだろうか。だが，例えば新聞記事の文章が伝える像は，そのまま対象を写しとる「写像」とはなっていない。古田徹也は，後期 Wittgenstein が「あるイメージで物事を捉えるという意味で，『ある像のもとで物事を捉える』という言い方をする。つまり，後期の彼がいう『像』とは，物事の特定の見方を表すということだ」としている（古田 2020:132）。古田の指摘の中で特に「特定の」への強調に注意しておきたい。像は世界の普遍的な「模型」ではなく，ある特定の文脈で物事を捉えるある特定のイメージを意味している。

したがって，第二に，新聞記事の文章による像が，その記事を伝える文脈で実際に何を意味しているのかを見ていかなければならないことになる。大谷弘は，次のようにいう。

> 問題となっているのは，（中略）文を用いて「言われていること（what is said）」である。これは，文の言語的意味のことでもなければ，その文を用いた言明によって暗に伝えられている「含み」でもなく，その言明の意味内容のことである。大雑把には，その文が口にされる――「発話」と呼ばれる――際に，その文が表す命題（proposition expressed）と言ってもよい。ポイントは，言語としては同じ文だとしても，その文を用いて特定の発話の場面で「言われていること」は異なりうるということである。（大谷 2020:42）

古田は，次のように指摘する。

> 肝心なのは，像とは，物事の見方や活動の仕方を曖昧に―つまり，多様な仕方で，あるいは未確定な仕方で―方向づけるものだということである。（中略）人はしばしば，（中略）記号列を口にし，その際に何らかの像を抱くだけで満足してしまう。なぜなら，そうした記号列によって喚起される像が意味ありげだからだ。もう少し正確に言えば，その像がなにかしら意味のある主張内容を示唆するからだ。しかし，それだけなのだ。像はそれ自体としては，人間の行動をどのように見るか，人間の行動に対してどのような探究や活動を行なっていくか，その方向性を大雑把に示すだけなのである。（古田 2020:136）

これはそのままニュース・フレーム論に敷衍できる指摘である。テレビニュースや新聞記事が伝える像は，世界の正確な「模型」ではなく，いかにも意味ありげな漠然としたイメージを喚起しているにすぎないということになる。

> 我々の言語は，何よりもまず像を描く。像によって，何が起こらなければならないのか，像をどのように使用すべきなのか，それは暗闇のなかに置かれたままだ。しかし，我々の表現の意味を理解したいのなら，それを探究しなければならないことは，とにかくはっきりしている。だが像は，そうした仕事を，我々に免除しているように見える。像は，ある特定の使用を，す

でに指し示しているように見えるのだ。このようにして像は，我々をからかうのだ。(『哲学探究』第二部§55, Wittgenstein 2009, 邦訳書 2020:386)

大谷は，例えば言語学で物の名前と言った時に机，椅子，パンのような「中くらいの大きさの固形物」を「モデル」として解釈してしまうように，「像とモデルのペアにこだわり，それを哲学的理論が従うべき絶対的枠組みとしてしまう」ことが問題だとする（大谷 2020:42)。像が喚起するいかにも意味ありげな漠然としたイメージと，それが適用される状況のモデルのペアが形成する枠組み。ここで提起されていることは，そのままニュース・フレーム論へと展開できるように思われる。

一方において古田が言うように，後期 Wittgenstein から得られる示唆として，「ウィトゲンシュタインが強調するのは，像が我々にそうやって強い影響力を振るうことは『人間の生活において最も重要な事実のひとつだ』」ということも忘れてはならないであろう（古田 2020:147)。つまり，われわれは日常生活において多くの場合，言葉で構成された像によって物事をとらえるしかないのだ。だからこそ，像がどんなイメージを喚起するのか注意深くなる必要があるのである。

【参考・引用文献】

Boyle,M.P. & D. M. McLeod,2018, “News Framing and Social Protest :Toward a Comprehensive Model,” P. D’Angelo,ed., *Doing News Framing Analysis II: Empirical and Theoretical Perspectives*, New York: Routledge, 295-319.

D’Angelo,P,2002, “News Frame as a Multiparadigmatic Research Program: A Response to Entman,” *Journal of Communication*, 57(1), 870-888

Entman, R.M.,1993, “Framing: Toward Clarification of a Fractured Paradigm,” *Journal of Communication*, 43, 51-58.

Entman, R.M.,2004, *Projections of Power: Framing News,Public Opinion,and U.S. Foreign Policy*, Chicago, IL:The University of Chicago Press.

Fuglsang,R. S.,2001, “Framing the Motorcycle Outlaw,” S. D. Reese, O. H. Gandy Jr., and A. E. Grant, eds., *Framing Public Life: Perspectives on Media and Our Understanding of the Social World*, Mahwah, N.J.: Lawrence Erlbaum,185-93.

古田徹也, 2019,『ウィトゲンシュタイン　論理哲学論考（シリーズ世界の思想)』角川選書

古田徹也, 2020,『はじめてのウィトゲンシュタイン』NHKブックス

Hanitzsch,T.,2007, “Deconstructing Journalism Culture: Toward a Universal Theory,” *Communication Theory*, 17(4), 367-385.

Kuhn,T.S.,1962,1970, *The Structure of Scientific Revolutions*, Chicago: The University of Chicago Press.（中山茂訳,1971,『科学革命の構造』みすず書房）

Matthes, J., & M. Kohring, 2008, “The Content Analysis of Media Frames: Toward Improving Reliability

and Validity,” *Journal of Communication*, 58, 258-279.

McLeod, D. M., and B. H. Detender,1999, “Framing Effects of Television News Coverage of Social Protest,” *Journal of Communication* (summer): 3-23.

野矢茂樹, 2022,『ウィトゲンシュタイン「哲学探究」という戦い』岩波書店

大谷弘, 2020,『ウィトゲンシュタイン 明確化の哲学』青土社

Pavlik,J. V.,2001, “News Framing and New Media: Digital Tools to Re-engage an Alienated Citizenry,” S. D. Reese, O. H. Gandy Jr., and A. E. Grant, eds., *Framing Public Life: Perspectives on Media and Our Understanding of the Social World*, Mahwah, N.J.: Lawrence Erlbaum, 311-20.

Reese, S.D.,1990, “The News Paradigm and the Ideology of Objectivity: A Socialist at the Wall Street Journal,” *Critical Studies in Mass Communication*, 7, 390-409.

Reese, S.D.,2001, “Prologue—Framing Public Life: A Bridging Model for Media Research,” S. D. Reese, O. H. Gandy Jr., and A. E. Grant, eds., *Framing Public Life: Perspectives on Media and Our Understanding of the Social World*, Mahwah, N.J.: Lawrence Erlbaum, 7-34.

Shoemaker, P.& S.D.Reese, 2014, *Mediating the Message in the 21st Century: A Media Sociology Perspective*, New York: Routledge.

Tuchman, G.,1978, *Making News: A Study in the Construction of Reality*, New York: Free Press.（鶴木眞, 櫻内篤子訳, 1991,『ニュース社会学』三嶺書房）

Van Gorp, B.,2007, “The Constructionist Approach to Framing: Bringing Culture Back In,” *Journal of Communication*, 57(1), 60-78.

Wittgenstein, L.,2003, *Logisch-philosophische Abhandlung*, Bibliothek Suhrkamp.（丘沢静也訳, 2014,『論理哲学論考』光文社古典新訳文庫）

Wittgenstein, L.,2009, *Philosophische Untersuchungen,Revised 4th ed*.,Wiley-Blackwell.（鬼界彰夫訳, 2020,『哲学探究』講談社）